



下北っていう街の音だから、 内省的で私小説的

「セイブ・ザ・下北沢」と曾我部恵一

志田歩

東京の下北沢では、行政により既存の街を真っ二つに分断する都市計画道路補助54号線という新規道路の計画が進められている。これに対して僕自身も参加している「セイブ・ザ・下北沢」というチームが結成され、何とかこの計画をストップさせようと、様々な活動を開始したという報告を、本誌の昨年5月号「ポイント・オヴ・ヴュー」で書かせてもらった。本稿では、その後の経過報告をさせていただきたい。

まず世田谷区が、今年3月に地区計画の素案を発表。これにより下北沢駅周辺の大規模な再開発も連動していることが明らかになった。基本的に道路が大きければ大きいほど、それに面する建物の高さの制限も緩やかになる。つまり54号線は単に商店街を貫いて新しく作られるだけでなく、高層化により下北沢の街並みを一気に改変するための前提にもなっていることが明らかになった。

これに対して「セイブ・ザ・下北沢」が集めた反対の署名は、街頭とウェブ (<http://www.stsk.net/>) を通じて1万人を突破。今年6月7日に東京都と世田谷区に提出し、さらに多くの声を募っているところだ。他にも「セイブ・ザ・下北沢」は、下北

沢を愛する学者や文化人による講演会の開催、交通量調査、54号線を前提としない街づくりの代替案の作成、マスコミを通じての情報宣伝など、様々なアクションを展開してきた。前回、計画中和書いたコンサートの第1弾も、5月21日にフリー・ライブ「セイブ・ザ・下北沢・ナイトVOL.1」として実現。ヴァイオリン奏者のHONZ Iも参加しているアコースティック・グループの素(もと)と曾我部恵一が出演し、大盛況を博した。

それに加えて曾我部は、ニュー・アルバム『Sketch Of Shimokizawa』を6月16日に下北沢限定で発売。ジャケットの中に「セイブ・ザ・下北沢」のフライヤーを折り込むなど、作品を通じて54号線に反対する意志を鮮明に表明している。ここからは曾我部のコメントも交えつつ、どんな動きが起きているのかを伝えていこう。

*

——今回のCDは、初めはシングルって話から始まったんだよね。
「そうなんです。最初の案としては、いろんなミュージシャンが集まって、各自下北にまつわる曲を、1曲2曲CDで出して、それが安価で売られてるっていうのが

いいんじゃないの、っていう企画の一環だった。でも考えていくうちに、はつきり刻印のようなものにしたいな、と。この「道」のこととか、いろんなものを含めて、自分が子供連れて買い物に来る、それで仕事してる下北沢っていう街の、今の姿を残しておきたいなと思って。だったらアルバムとしてしっかりしたものにした方が、絶対聴き応えもあるだろうし」

——かなり短い期間で一気に作ったでしょ。「確か4月に始まった話ですね」

——シングルからフル・アルバムへと膨らんで、わずか2カ月でリリースまでこぎ着けたんだから、作ってる側としてはそうとうなインスピレーションがあったのでは？
「うん、ありますね。下北だからね。いい街だと思うから……。なんか田舎みたいじゃないですか。六本木とかは、お金って感じの街じゃん。下北はもうちょっと重きをおいてるところが違うのかなみたい。お金というよりも文化だったりするのかなって感じ。貧しい文化的な感じ(笑)。居て楽だし、ちょっと気分変えたい時とか、喫茶店で詞を書いたり、普通にメールで仕事したりもするし。で、とにかく「道」の話を知った時は、けしからんと思ったし」

